

立命電友会

「立命電友会と立命館学園の

発展、充実を期待して」

大阪ヒューズ株式会社
取締役社長
加納久雄（昭和三十年卒）



夢と希望に満ちた我々の電友会が結成され、早や二年が経過いたしました。得田会長をはじめ役員の方々、そして先生方のご尽力と、大南総長を中心に学園全体のご支援とご協力によりまして、着々と電友会の基盤が固まりつつあることは、全会員にとりまして大変喜

ばしいことと存じます。又、本年三月二十六日には立命館大学びわこ・くさつキャンパスの開学記念式典が盛大に挙行され、学生諸君はもとより、学園の関係者、そして、全ての卒業生の期待を担い二十一世紀に向って大きく飛躍いたしました。今後はこの三者が一体となってその発展に努力し、世界に誇れる素晴らしい立命館学園にしていかなばなりません。電気電子工学科の学舎と各種設備も立派になりました。先生方の適切な指導と学生諸君のひたむきな向学心により、毎年優秀な卒業生が社会に出られ電気事業の発展に貢献されることを祈念しております。さて、私も一九九五年三月で、

卒業して四十年を迎えます。月日の経つのも早いもので、もう四十年も経つのか、と云った感じがですが、この四十年間を振り返ってみますと、先ず学園全体、そして理工学部、電気工学科も大きく変貌、発展いたしました。昭和二十六年入学しました頃は、衣笠の二階建て木造学舎でしたし、試験、実験設備も新品の機器、計器類も量、種類ともに少なく、電線類に至るまで古い物が多く、何んとか実験が出来る程度であったと思います。このように当時は貧弱な設備でありましたが、その後十年位の区切りでみますと、最近では急速に学舎をはじめ電気機器、電子機器、計測器等の実験設備も充実され、内外の文献、専門雑誌に至るまで整備され、びわこ・くさつキャンパスでは学生諸君がじつくりと勉強が出来る環境が整いました。しかしながら電気機器、電子機器の開発と普及のスピードは早くなるばかりでありますので、学園当局におかれましては予算面等むづかしい問題も多々あるかと存じますが、一層の設備の充実と質の高い指導にご配慮をお願いする次第でございます。

一方、各産業界も高度経済成長時代を経て順調に発展成長を遂げ昭和四十八年から四十九年に掛けては戦後日本経済が初めて経験した石油ショックによる不況と円高による不況がありました。が、世界でも稀な経済発展を遂げ、先進国の仲間入りを果たしたのであります。電気産業についてみますと、電力業界では水力と石炭火力発電が主力でありましたが、火力は石油と天然ガスが主力となり、絶対量としては原子力発電が最もウェイトを占めると云った具合に変化しています。家電業界では豊かな生活に必要な電気器具はすべてそのものが生産され使用されていきます。電子機器にいたっては、物凄く早さで次々と製品が開発され、コンピュータや産業の米と云われる半導体の開発は日進月歩から今や秒進分歩と表現される進歩が続いています。

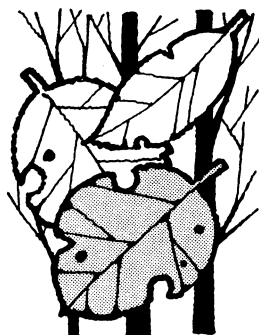
このように多少の波はありましたが、先ずは順調に発展を続けてきました。日本経済も大きい時代の変化が押し寄せて参りました。即ちベルリンの壁が崩壊して以来、経済面におきましては全く国境が無くなり世界の資金が毎日少しでも有利な対象を求めて飛び回り、大巾に人件費の安いアジア特に中国に向って、世界の企業の進出が活発化し、一次製品や単純加工製品の一大生産拠点となりつつあります。又、台湾やマレーシアにおいては、かなり高級な製品まで生産されています。この結果、国内生産品の割り高か、所謂、内外価格差の発生とアジアへの企業進出による産業の空洞化が問題となってきました。特に石油製品、運輸、通信、電力、都市ガスの割高が目立ち公共工事も同様となっています。これらの内外価格差の解消には、政府の規制緩和をはじめとし、各省庁の外郭団体の統廃合等の抜本対策が必要であります。各企業としては、製品の高級化やアジア諸国では真似の出来ない特殊技術等をもつことと、経営全般の徹底した合理化により対応するしかありません。又、全米では西暦二〇〇〇年より、日本は十年遅れの二〇一〇年より情報のネットワーク化（マルチメディア）が実施される予定であり、卒業以来経験しなかった政治、経済両面で大きな変革の時代に入りました。皆さんで知恵を出し合って生き抜いて行かなばなりません。

ここで電友会、校友会の皆様におし上げ度いことがあります。学園創立九十周年の記念事業資金の募集の節は皆様のご理解とご協力によりまして目標額を上回る資金が集まりましたが、この度のびわこ・くさつキャンパスの建設並びに設備の拡充資金の募集につきま

しては、前回の募集と余り間隔がなかったことや、バブル崩壊後の長引く円高不況により平成七年三月までの目標額にまだ到達していないとのこととです。皆様よくご存知のアメリカの私立大であるハーバード大学の経営について三年度前における民放テレビ局によって

詳しく紹介されたのを見ました。それによりまずと大学の必要費用は学生の授業料は勿論収入としていますが、全卒業生の名簿が完備しており、毎年大勢の卒業生から多額の寄附金があり、さすがはアメリカです、毎年一〇〇万ドル以上の寄附をする人が数十名いるとのことで、振込まれてきた金額を記載した名簿が映像に写っていました。この寄附金の総額は毎年凄い金額で、この資金で大学の運営が立派にされているとの説明でした。創立九十周年の募金の折り、最終の寄附者名簿が送られてきましたので、全ページ見せていただきましたが、日本人は豊になったと云われているのに先ず、卒業生で寄附金を全く出していない人が余りにも多いのに驚きました。何故でしょう。今回は不景気の名のもとに、もっと多くの人が出していないものと考へられます。我々が青春時代の四年間を勉強にスポーツに又、多くの友達を得た、楽し

かった想い出の多い学園ではありませんか。ハーバード大学までいなくても、身分相応のものは協力しようではありませんか！立命館学園の大発展を願って。



新任のご挨拶

寺井 秀一

はるかに琵琶湖を望む高台。緑あふれる広大な敷地にインテリジェントキャンパスの名に恥じないすばらしい情報インフラの整備されたここ、びわこ・くさつキャンパスで研究・教育に従事できる喜びをかみしめつつ、着任以来、早や八カ月が過ぎようとしています。昭和四十四年大学院を終了後、(株)日立製作所に勤務して二十五年が経過しました。人生の四半世紀を企業人として研究部門とコンピュー

タ事業の開発最前線で仕事をしてきましたが、これからはこのささやかな経験を生かし、明日の日本の科学技術を支える若者達が将来、学術界、或は産業界に於て研究者、技術者として成長してゆくのに少しでもお役に立てばと思っています。

当研究室では主に、コンピュータサイエンスにかかわる諸問題を研究課題としてとりあげ、計算機を駆使して、アルゴリズムの研究と実践的なプログラミング技法を習得することを狙いとしています。具体的には、LSI(大規模集積回路)の設計をコンピュータを用いて行うためのCAD(computer Aided Design)システム、あるいは、DA(Design Automation)システムにおける、自動レイアウト方式の研究がテーマです。レイアウト問題における最適解を求めるための種々の技法を考察すると共に、経験的アプローチとして、人間がもつ様々なノウハウや知識をコンピュータで処理するエキスパートシステムを用いた、AI(Artificial Intelligence)的手法も視野に入れつつ研究を進めてゆきたいと考えています。

さて、スーパーコンピュータからパーソナルコンピュータ(パソコン)まで、コンピュータがLSIで作られていることはよく知られているところです。また、われわれが普段、何気なく使っている家電製品にもマイクロプロセッサ(マイコン)が組み込まれ、いろいろな便利な機能を提供してくれています。このマイコンもLSIのひとつです。このようにいまや、LSIは生活に深く根をおろし、今では「産業の米」といわれるまでになっています。このLSIを設計するのにコンピュータを使用し、人間がやっているのは到底できないことを実現しようとするのが「デザインオートメーション」という技術です。LSIの設計の中にレイアウト設計という工程があります。AND/ORゲートやフリップフロップなどの論理素子をチップの上にならべ(配置)、素子間を論理的に接続する(配線)ことをレイアウト設計といえます。最適な配置を求めることが設計の重要な目的関数となりますが、いま、例えば二十個の素子の最適な配置を求めることを考えてみましょう。もっとも単純なやり方は、あらゆる配置のケースを洗いだし、目的関数の値を最適とするような配置を求めるやり方です。しかし、試算してみればすぐわかるように、これは順列を計算することになり、

十の十八乗とおりのケースが考えられます。これでは現存する最高速の超大型コンピュータをもってしても何万年もかかってしまいまう。実際のLSIでは素子の数は何十万、何百万もあり、このようなやり方では宇宙創世以来の時間をはるかに越える時間が必要となります。従って、実用に耐え得る時間内で最適解にできるだけ近い配置を考えるアルゴリズムを追求することが重要な課題となります。「不可能を可能にすること」、これが当研究室の基本テーマです。とはいえ、今はなにもわからず、手探りで走り始めたところです。立命電友会の皆様のご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。生まれ、育ちは大阪・吹田市で、六年間、京都で大学時代を過ごしました。会社に入ってからはずっと東京、神奈川での生活でしたが、二十五年ぶりに関西に戻っての人生の再出発となります。琵琶湖の喉仏、南郷洗い堰を一望できる瀬田川河畔に居を構え、この四月、図らずも私と一緒に本学にお世話になった息子(文学部地理学科一回生)と二人、男世帯で生活しています。どうか近くへおいでの折りにはお気軽にお立ち寄りください。

追悼・羽村二喜男先生

辻村 寛

名誉教授羽村二喜男先生が平成六年八月十三日逝去された。享年九十五歳であった。先生は昭和二十一年（一九四六年）に京都大学より立命館専門学校工学科の部長として赴任され、昭和二十九年

で定年退職までの期間、理工学部の中で常为中心的な役割を担って来られ、定年後も昭和四十三年まで特任教授として後進の指導に当たられた。特に、大学理工学部への昇格と大学院工学研究科の設置に尽力され、今日の理工学部発展の基礎を築かれた功績は大きい。

先生は、京都帝国大学に大正十二年に専任講師として着任されているが、私立電気工学講習所講師も兼任され、昭和十三年に電気工学講習所を本学が引き継いでからも本学の非常勤講師を兼任されていたので、講習所、専門学校創設期の先輩卒業生に会うと、先生の消息を懐かしげによく尋ねられたものである。

大学昇格当時の電気工学教室は京都大学出身の教員で占められていたが、全員先生の教え子であり、先生を中心に教室はよく纏まっていた。先生は漱石が小説の中で描写する帝国大学教授の風格をもつておられたと思う。端麗な容姿と威厳に満ちた言動、大変几帳面な性格等々、教室の先生方も畏敬をもって接しておられた。

であった。

先生の自宅は吉田神社のそば、元、川上肇博士の住居であった。奥様が川上博士のご長女であり、末川総長のご令室とは叔母姪の關係にある。助手時代には毎年暮れには奥様の手料理を御馳走になった。先生は相当の酒豪で乱れることはほとんど無かったが、それでも学校では見られないくだけた一面を披露されて楽しかった。「おい、（両手でパンパン・・・）」で話が通じる仲睦ましいご夫婦であった。

八月十八日、大学から連絡があった。先生の逝去を知らされた。先生のご意志により、内輪のみの葬儀が行われた由である。荻屋公明教授・井上和夫教授とともに弔問に伺ったのであるが、「几帳面であったから何から何まですべて大学ノートに書き記して指示してありました」と嫁がれている令嬢が漏らされていた。先生の遺影は、退職されるとき何か記念品をとお尋ねしたときに「もう歳だから万一のときにも必要だからね」と云われてお贈りした写真であった。あれから三十年、折にふれお伺いしていたが、何時も電気工学科のことを気にされ、学校の発展を喜んでおられた。先生のご冥福を心よりお祈りする。

終身会費御振込のお礼とお願い

本誌第一号、第二号におきまして立命電友会の終身会費御納入のお願いを申し上げましたところ、合わせて五百名にもものぼる方々よりお振込み頂きました。役員ならびに事務局一同厚く御礼申し上げます。今後さらに大学・電気電子工学教室・校友皆様方の相互の交流・親睦をはかるべくその活動を行って参る所存であります。つきましては本会の安定した運営を維持・確保すべく、未だ御納入頂いていない校友の方々には、是非とも終身会費をお納め下さい。重ねてお願い申し上げます。学生諸君にも卒業当日の納入について理解を頂いております。校友の皆様方には郵便振込での納入をお願いいたしております。宜しく御協力のほどお願い申し上げます。

終身会費

納入方法

壹萬円（立命電友会会則第十五条に基づく）
郵便局所定の振込用紙に卒業年、御芳名、御住所、電話番号ならびに終身会費納入の旨を明記の上、最寄りの郵便局にて終身会費をお振込下さい。

振込通知がありしだい事務局より領収書および立命電友会会誌設立記念号（残部僅少）を送付いたします。

振込先 〇一〇六〇一九七五〇〇三
立命電友会

御問合先

滋賀県草津市野路町一九一六
立命館大学理工学部電気電子工学科内
立命電友会事務局

電話 〇七七五・六一二六六二
FAX 〇七七五・六一二六六三
(中西、津田川、高山)

電気電子フォーラム94の開催

今年も電気電子フォーラム94が電気電子工学科と総合理工学研究機構との共催で十月二十一日にびわこ・くさつキャンパスで開催された。今年は第三回目で、「信号・画像処理と計測」というテーマのもとに、午前の部は計測と信号処理を、午後の部は画像処理を中心としてそれぞれ現状と将来展望についての講演が行われた。当日は生憎の雨模様であったがそれにもかかわらず百名を超える参加があった。午前の講演は、本フォーラム実行委員長 津田川 勝教授と総合理工学研究機構長 田中道七教授による開会の辞の後、川畑隆夫教授の司会で進められ、先ず「計測科学」と題して、荏屋公明教授により、計測に関する学問的位置づけを含めた計測科学構築のための二つの方向性などが話された。ついで、「GPS信号の統計学的処理と推定理論」について、杉本末雄教授により、GPS (Global Positioning System) による位置検出の基本原理の解説から線形システム理論に基づく信号処理の実際とその実験結果に関しての講演があった。

午後の前半部は杉本末雄教授の

司会で進められ、先ず「バーチャルリアリティを用いた臨場感通信における画像処理技術」と題して、(株)ATR通信システム研究所の岸野文郎氏が、現在注目されているバーチャルリアリティを通信に適用した例として臨場感通信会議を取り上げ、その概念と実現のための画像処理技術について、京都国際会議場イベントホールとそこから約四十km離れたATR研究所内の二カ所の計三カ所を結ぶ三地点の臨場感通信会議のデモのビデオテープを交えながらの報告が行われた。ついで、「画像生成とその応用」と題して、松下電器産業(株)映像音響情報研究所の鷺島敬之氏による当研究所で開発された最近の画像生成技術(CG)の紹介とそのデモビデオテープを交えて、CGの歴史、現在技術、および将来展望が話された。

コーヒープレークの後、「画像処理技術の応用と高速化」と題して(株)東芝関西研究所の本戸出正継氏により、画像処理の現状技術による種々の分野における応用例から高速化技術の開発現状やトピックスが話され、さらに将来へのさらなる実用化に向けての氏の見解が示された。最後に、東京大学工学部有本卓教授が、「時系列と画像信号処理のためのマッチングと

フュージョン」と題して、これまでに教授主宰の研究室で行われた画像・信号処理に関する研究の中から、マッチング法やいろいろなセンサからのデータを融合(Fusion)する方式に基づく、移動ロボットの位置推定(内界センサ情報と知識のベイズ的フュージョン)、自己位置同定とマッチング、画像データ圧縮等の研究内容とその解析法に関する講演があった。講演会の後、懇親会が行われ、相互の親睦をはかるとともに講演題目に関する個別討論も盛んに行われて和やかな雰囲気、かつ有意義に終えることができた。

津田川 勝 記

同窓会だより

立電会第二十回總會

(H6・10/27)を挙(報立)

立電会の会員構成、性格等に就きましては「立命電友会誌設立記念号(H4・11)立電会回顧録」にて述べた通りですが、非常に残念に思われる事は会員に若年層の少ない事です。現在名簿登録されて居るのは約二百名程ですが、年齢層は二十三卒〜六十一卒と可成り幅廣いものとなって居ります。

電友会と著しく異なる事は、單なる同窓会でなく、会員同士が仕事(大方は電気工事関係)に関連して親睦を深めることを目的としている事です。その為には名簿も勤務先、立場等を明記したものに整備したいと考へて居ります。

今回「第二十回總會」を終って考へさせられることは、總會案内を出した数に対して約半数も返事の無かったことです。然も返事の半数以上が欠席でした。その結果として参加者も二十九名と誠に淋しいものとなりました。然し乍ら出席者は毎回出席している常連の人達で、初めて参加した人達も居りましたが、可なりの盛会となりました。

そこで反省させられる事は總會の開催時期は秋を避けた方が良くのではないかと云う事です。秋は公私共に行事が多く、欠席の理由も大半が他の行事と重って居ると云う事や、又は仕事の関係で出張していると云うのが多かったです。それと總會の開始時間を七時以降でないと現在現役で務めて居る人達には無理だと判りました。以上の事柄を反省しまして、次回は春頃で七時頃の開催とし、名簿も新しく整備したものを出席者には渡し

たいと考へて居ります。又「関東立電会」の様に会員同士が日頃

から交流が持てるように定例会を持ち、また年に何回か会報も出せる様にしたいと考えて居ります。以上で「立電会第二十回總會」を挙りました事に付いての報告とします。

立電会相談役 林 繁男 記

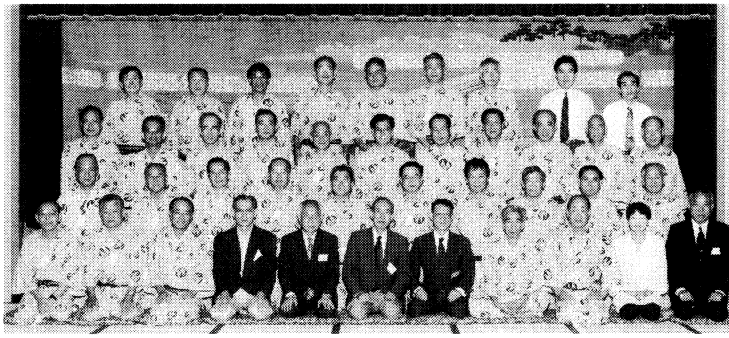
「還暦同窓会」の開催:

三十二電友会

十月も半ばというのにまだ夏が続いているような暑さのなか、十六・七日にかけ還暦同窓会を開催しました。私達の集いは五年毎ですが、今年は正規組(S九生)が満六十才になったので臨時の開催となったわけです。

今回は平成四年で、青春の一齣となった懐かしい衣笠に別れを告げ「びわこ・くさつキャンパス」の工事現場を見学しました。今回は四月から開学なった新学舎を見学し、豊かな環境と立派な施設に隔世の感を抱き思わず溜息が出ました。

見学後、学生時代の恩師(辻村・前田・小笹先生…小原・山本・梶田先生は都合悪く欠席)を瀬田のあみ定にお招きし、勢揃いした三十七名の一言スピーチで夜の終りも忘れ最高に盛り上がった懇親会となりました。



翌日は観光バスで、狸の焼物で有名な信楽町に出かけ「玉桂寺」に詣で、健康と青春の保持を祈禱していただき、「八十にはなったが人生はこれからだ、お互いに頑張ろう」と誓い合い、再会を約束して東西に別れました。

今回都合悪く参加いただけなかった方も次回必ず出席して下さい。
(幹事・菊屋・松井・小松・澤田・植村・塩山・松添・元村・上林)

立電四十一会

立命館大学電気工学科四十一周年の会を平成六年十一月三日(文化の日)に第一部を琵琶湖草津キャンパスに集合、まず、新キャンパスの広さにおどろきました。残念なことは今回、少なく五名と子息一名で、四十一会のメンバー中西教授にお世話になりました。ウエストウイング二階「電気電子系共同第一研究室」で談話、木瓜原遺跡(ぼけはら)・古代の製鉄コンピナート・がキャンパス内にあることがわかり、無理なお願いをし、見学いたしました。続いて本来の目的、実験室を見学、すばらしい設備に驚きました。我々の時代との違いが話題になりました。しかし、重電関係のモータ等は思い出し、あるものがあり感激いたしました。

第二部はクサツエストピアホテルに移り、浦山先生、辻村先生、前田先生、神田先生、(順不同)方々を交え七名の同窓メンバーで懇親いたしました。話題は全員の近況報告で終始し、あつという間の二時間でした。毎年開催しており、今回七回目を迎えています。今回は一年半後九十六年春に開くことにきめ、二次会を同ホテルラウンジに移り懇談、七時頃、再開を

誓い散会致しました。



辻村研同窓会

毎年恒例となっています辻村・前田研究室OB会を去る十二月十日(土)、クサツエストピアホテルに於いて開催致しました。今回は、理工学部のみならずキャンパス移転後、最初の会となるので、キャンパス見学会なるものを行い、自然に恵まれた広大な新しいキャンパスを見て頂きました。宴会には、御遠方の方々を含め七十名の御出席を賜り、午後六時三十分より、辻村先生、前田先生の御挨拶を以て、盛大に催されました。出席された方々は、学生時代の思い出から近況まで、色々な話題に盛り上がりました。また様々

な年代の人との親睦を深めることができ、時間が経つのを忘れるほどでありました。

さて、今回初めて、欠席される方々に諸経費の御寄付を御願い致したところ、多数の方々に御協力頂きました。この欄を借りまして御礼申し上げます。来年は、辻村先生の在職中最後のOB会となりますので、さらに盛大な会に致したいと思っております。

(幹事 澤田・水田 記)



三十四年同窓会御案内

平成七年一月十五日(日)午前十時半、立命館大学びわこ・くさつキャンパス内ウエストウイング二階にて同窓会を開催致し、その後午後一時半頃より田鶴(京都市下京区木屋町松原上ル)にて二次会

を開宴致します。かならず出欠の御返事下さいますようお願い致します。

連絡先 ○七八一五八三一二四九

(永野護まで)

(幹事 大橋・安藤・永野)

院生の会

十一月十九日(土)午後二時より、立命館大学BKコアステーション第一会議室において第四回総会を開催致しました。その夕刻同建物三Fラウンジにて井上和夫、菊屋公明両教授をお招きして懇親会を開催しました。また当日「院生の会会報(第三号)」を発行し、会員皆様方に発送いたしました。

(幹事 高橋悌史 記)

事務局便り

会報第四号の発行にあたり御寄稿頂きました方々には心より御礼申し上げます。御連絡先等の変更がありましたら本会まで御一報頂きますようお願い致します。

立命電友会事務局連絡先

〒五七五一一七七

滋賀県草津市野路町一九一六

立命館大学理工学部電気電子工学科内

電話 ○七七五六一一六六

FAX ○七七五六一一六六

(題字は久保之俊氏)